

## 研究成果

松王はまず、日本ではまだ研究者がほとんどない、統計の哲学についての研究を現在進めている。科学研究における確からしさ（不確実性）の判断基準として、今後ますます統計的手法への依存度が高くなると考えられる。しかし一方で、統計手法には、ベイズ統計、頻度主義統計、尤度主義統計、あるいはモデル選択理論など、それぞれ考え方に大きな違いがあり、各種法を日和見的に使用するのでは、却って科学研究に混乱を招く可能性がある。そのため、各手法の原義に立ち返って根本的な問題を明確化し、問題回避の糸口を見出すという、統計の哲学的究明が不可欠だと思われる。松王はそうした考え方に立ち、研究の手始めとして、アメリカ科学哲学界の重鎮で、統計哲学（ならびに生物学の哲学）の世界的権威であるE. ソーバー（ウィスコンシン大学）とほぼ1年に渡って、統計哲学についての議論を重ねた。その結果として、彼の主著の一つであるEvidence and Evolution (2008, Cambridge UP)の第1章（統計哲学についての章）を抄訳し、日本の現行の科学哲学研究との溝を埋めるべく多くの注釈を付けて、名古屋大学出版会から『科学と証拠 ～統計の哲学 入門』というタイトルで出版した。この翻訳は著者との綿密な議論を通じて行ったものであり、特筆すべきは、翻訳としてはきわめて異例ながら、原著の一節分（第8節、AICに関する節）が訳者の疑問点をきっかけとして、丸々新たに書き直されることとなった。ソーバーとは、今後も定期的に議論を重ねていく約束をしている。松王は他に、技術倫理の研究メンバーと共著の『誇り高い技術者になろう』（名古屋大学出版会、第二版）を執筆、また2011年に科学哲学世界大会（CLMPS, フランス）で発表した「科学と価値判断」に関する論考（米のH. ダグラスの「科学における価値役割論」に対して、不確実な結果に関する科学者の価値認識について、修正を図ろうとするもの）を論文にまとめ、投稿している。院生は、博士課程に入学した新納が、これまでにない新しい研究を開拓しようとしている。彼女は長年、看護学の研究・教育に携わってきたが、看護学の閉鎖性を打ち破るべく、科学哲学や科学技術倫理の考え方をを用いて、看護学そのものを対象としてその「科学」あるいは「人間学」としての問題・課題を客観的に分析しようとしている。その成果の一部として、看護学における主概念である「ケアリング」についての哲学的分析を試み、そのオールラウンド性に関する批判的検証結果を北海道大学哲学会において発表した（すでに論文にまとめ、投稿中）。同じ北海道哲学会で、基礎論研究室の他の二人の院生も発表を行った。小野田は現在、引き続きアインシュタインの一般相対性理論における「マッハ原理」の位置づけについて研究を進めているが、このマッハ原理がアインシュタイン自身によって立てられながら、理論においては不完全な形でしか実現していないことについて、哲学的時空論ではどのような評価になるかを検討した。まだ十分な結論には達していないながらも、関係説と絶対説の対立軸を明確にする中で、一般相対性理論の哲学的評価に必要な条件を、いくつか明らかにした。もう一人の発表者、会場は、彼の修士論文に関連した因果論をテーマに発表を行った。会場が目指すのは、近年にわかに注目されている、W. Salmon的な機械論的因果論の実践的応用について、これを実用レベルにもたらしめるための具体的条件を明らかにすることである。応用の試みとしては、E. Weberの社会学への応用、F. Russo & J. Williamsonの疫学への応用などがあるが、会場は特に、まだ素描でしかないWeberの社会学的応用に着目し、これを発展させようとしている。今回の発表ではこうした応用実現のための、哲学的な問題整理を哲学的因果論を通史的に観る中で行っている。最後に、尾崎は具体的な成果発表はしなかったものの、G. バークレーの哲学と物理学の関係について、引き続き研究を進めている。尾崎は、「（常識的）感覚がバークレーにとって唯一realなものであり、これをすべての起点としてバークレーが物理学を構築しようとした」という、これまでの尾崎の解釈を、いくつかの方法で補強しようとしている。一つはほぼ同時代のライプニッツとの対比で、同じ唯心的な傾向をもつ両者の違いを明確にするという方法。もう一つは、現代の反実在論の旗手であるB.v. フラーセンによる、構築主義的な手法（特に物理学の構築）を一つの試金石としてバークレーを再評価するという方法。この研究成果は、次年度中に論文にまとめて投稿する予定である。